

第三者意見

ミネベアグループCSRレポートを拝読して



株式会社日本政策投資銀行
環境・CSR部長

竹ヶ原 啓介氏

ミネベアグループCSRレポート2015は、過去最高の業績を達成した2015年3月期をCSRの実践という観点から振り返るに当たり、大きく4つの側面から「真摯なものづくり」に光を当てています。

トップコミットメントを皮切りに、まず目に飛び込んでくるのが“技術力”です。「CSR実践に向けた活動方針」に「製品を通じた社会価値の創造」が明記されることになったのに加え、新たに設定された新「5本の矢」戦略が打ち出す多様な技術と成長への期待、これを肉付けする「スマートライティング」の特集などからは、製品の開発・生産と社会的な価値創造の同期化を追求する企業姿勢とこれを支える技術力が印象的に伝わってきます。また、生産プロセスにおける環境対策がこれを補強しています。グループを挙げてエネルギー効率の改善努力を重ね、CO₂排出量原単位が着実に減少していますが、製品を通じた社会価値創造というテーマを、これを生み出す製造プロセスでの環境負荷低減によってしっかりと裏付けるのは、いかにも貴社らしいアプローチだと思えます。

次に注目できるのが“グローバル化”の一層の深化です。「CSR調達ガイドライン」の海外拠点への拡大など、これまでの取り組みのレベルアップに加え、新たにアジア主要6拠点に対してISO26000に基づく現状分析が行われ、本社と

連携した体系的なCSR推進の必要性が強調されており、貴社のCSRが海外拠点を巻き込んでいよいよ本格的に横展開される胎動を感じさせてくれます。さらに、レポート全体を通じて“人”を重視している点も今号の特徴といえるでしょう。創立100年に向けたキーワード「Change to Grow」の下、従業員一人ひとりが変化と成長の必要性を実感すべきであるというトップメッセージを受け、ダイバーシティやグローバル人材育成、マイオニックにおける「働きがいのある会社」の追求など、随所に人に焦点を当てた記載がちりばめられ、メッセージ性を強めています。

最後に、一連の活動の拠点である“地域とのつながり”です。今回は、米子工場とグループ企業マイオニックを取り上げ、地域にとって魅力的なパートナーを目指す姿勢をステークホルダーとの対話を通じて浮かび上がらせています。米子工場と、2009年と比較的最近にグループに加わったマイオニックを並置することで、貴社のCSR活動がバックグラウンドの違いを超えてグループ内に広く着実に浸透している様子が伝わってきます。

マイナス情報もしっかりと記載し説明責任を果たそうとする姿勢も維持されており、グローバル企業のCSRレポートとして完成度は一段と高まったように思います。今後は、中期事業計画の新たな目標である新「5本の矢」戦略の枠組みを生かし、貴社の成長とこれがもたらす社会価値の関係性をより具体的かつダイナミックに見せていただくよう期待したいと思います。

竹ヶ原 啓介氏

一橋大学法学部卒業後、日本開発銀行（現株式会社日本政策投資銀行）に入行。調査部や政策企画部、フランクフルト首席駐在員などを経て、現職。その他、環境省「環境格付融資に関する課題等検討会」委員、「環境成長エンジン研究会」委員、内閣官房「環境未来都市推進委員会」委員、内閣府「環境未来都市推進ボード実施推進会議」委員などを務める。

第三者意見をいただいて



常務執行役員
財務・コンプライアンス推進部門
CSR推進室、コンプライアンス推進室担当

松田 達夫

竹ヶ原様には当社グループのCSR推進について、継続的に重要なご意見・ご指摘をいただいております。本年度も大変貴重なご意見を賜りありがとうございます。

本年度のCSRレポートでは、事業活動を行う周辺地域とのコミュニケーション事例をお伝えすべく、国内外における

2つの事例を特集記事にて紹介しました。また、Hot Topicsとして、スマートライティングによる次世代型の照明システムへの挑戦について紹介し、「製品を通じた社会価値の創造」の実例を示しました。さらに、グローバルにおけるCSRマネジメントの推進事例として、ISO26000による現状分析の結果も報告しました。

こうした取り組みを高く評価いただきましたことを励みに、今後もさらにCSR活動の充実を進めてまいります。ISO26000の現状分析により明らかとなった課題に加え、未達成だった項目を中心に、引き続きCSR活動の改善を図り、前向きに取り組んでまいります。